Authenticityの多面的特質と授業への影響*

森下浩二**

The multifaceted aspects of authenticity and its effects on classroom activities

Koji Morishita

Abstract

In this paper, the focus is on the multifaceted aspects that the term “authenticity” can have in English classrooms. As for communication-oriented classroom, the term “authenticity” has given impact on which text should be chosen and how it should be used. However, it seems to be underestimated that the term “authenticity” has several aspects and that each aspect is interrelated to one another including evaluation of what learners have done. Authenticity is an entity which should be understood as a polyhedron but not as a single face. First, each aspect of “authenticity” is discussed. Then, the discussion is carried out about the multifaceted aspects of authenticity. Finally, the suggestion that the multifaceted aspects of authenticity will provide classroom activities with is discussed.

１．始めに

外国語学習において、コミュニケーション遂行能力の育成を考えた際、authenticity について考えることは多方面にわたり、授業計画を組み立てるきっかけを与えてくれる。それはテキスト選択に限定されず、授業案の立案、学習者の活動内容の評価まで含まれる。また、その多面性は個々に授業計画に影響を与えると同時に、お互いが関連して様々なレベルで授業計画に影響を与えることが予測される。

外国語学習のひとつの特徴として、授業内で学習・訓練したことが、そのまま授業外の実世界において目に見える形で利用できる点があげられる。吉田(2000,2002)は授業内を「the fishbowl」、また授業外の実世界を「the open seas」にたとえ、教師は学習者をいかにして 「the fish bowl」の中だけでうまく活動するのではなく、「the open seas」においても効率的に活動できる能力育成が可能か考える必要性を指摘している。

森下(1996)において、テキストの選択に焦点をあて、authentic materials の有効性について論じたが、本稿においては authenticity をキーワードとして、その概念が持つ複合的側面に焦点を置きながら、authenticity が授業に与える影響をまとめる。最初に各ポイントについてまとめた後、その複合性を指摘し、コミュニケーション遂行能力を目的とした授業に与える影響を考察する。

２．テキスト選択に関して

テキストの成立過程には２つの道筋が考えられる。そのひとつはもともと英語学習に使用されることを目的としたもの、そしてもうひとつは、当初の目的として英語学習に利用することを意識することなく、日常生活のそれぞれの役割を果たすことを目的としたもの－authentic materials－である。テキストの内容として、前者の場合は伝えるべきメッセージの存在が常にその発生・存在理由の重要なひとつとなるとは限らないが、後者はその伝えるべきメッセージが必ず存在している。たとえば、もともとテキストとして利用されることが前提として作成された教材の場合には、メッセージの内容よりも、それを利用して語彙数を増やす、文法事項を学習する点に本来の目的が存在する場合も多い。一方、authentic materials の場合には、伝えるべきメッセージの存在が、学習者にそのテキストが提供する内容に働きかける目的を提供することになる。この働きかけがテキストと学習者の間に情報のやり取りである interaction を生み出すことになり、学習者の動機付けを高める可能性があると考えられる（森下

* 原稿受付　平成 17 年９月３０日

** 佐世保工業高等専門学校　一般科目

1996)。ただし、Peacock(1997)は、学習者がその内容自体に興味を示すことがテキストとしての有効性を考える際の判断材料になるどうかについては、絶対条件とならない可能性を指摘している。

Wong, Kwok and Choi(1995)は次のように“authentic materials”の幅広い役割をまとめている。

“... authentic materials can help us to the aims of enriching students' experience in the learning and use of English, sensitizing them to the use of English in the real world, and helping them to generate a learning strategy for learning not only English but also other subject (p.318).”

テキストの一選択肢として authentic materials を考えた際、利点のひとつは、将来学習者が出会う学習言語を用いる状況･言語使用例を提供してくれることがあげられる。ここに英語という授業の特殊性も現れている。それは、教室で学習する内容が、そのままの姿で実社会において利用されることがイメージしやすく、いかに授業の中で学習者に模擬体験の機会を多く提供し、言語使用の訓練を考えるかが重要になるということである。

authentic materials が実際の外国語運用の見本を見せてくれるとは逆に、当初からテキストとして用いることが前提として作成されたものには、言語モデルとしての言語使用に不自然さが生じる可能性が指摘してある(Ur 1996)。机上において理路整然と作成されたテキストは自然なコミュニケーションの流れと異なる場合もあり、それが学習者のテキスト理解を妨げる可能性も考えられる。したがって、教室外の現実世界において英語を用いることが最終ゴールとして設定してある場合には、その言語モデルとしても authentic materials の有効性が高いのと同時に、学習者が communicative competence の育成を含め、テキストの内容理解に取り組む手助けが自然なかたちで組み込まれている可能性も考えられる。

このように外国語学習において有効性が期待される authentic materials であるが、その成り立ち自体が、学習者の到達レベルを考慮しているものではないことから、その利用において指導者に特に注意が必要となる。それは、学習者の言語レベルとの関係で、はたして学習者とテキスト間に interaction が発生するかどうかが問題となるからである。次に、学習者に焦点をあてて authenticity の与える授業への影響を考える。

３．学習者の言語到達レベルに関して

Widdowson(1980, Lee 1985 に引用)は、テキストの生誕目的とは別に、そのテキストに対して学習者が十分対応することができるか否かが authenticity の意味を考えるにおいて重要な要素となることを指摘している。実際のコミュニケーションを前提として、なんらかの目的を持って作成された authentic materials は、必ずしも学習者が対応できる言語レベルにあるとは限らない。すなわち、学習者とそのテキストの間に情報のやり取りが生じる可能性が低ければ、学習者はそのテキスト（またそのテキストを用いた活動）から多くのものを得ることは期待できない。そこでテキストの言語レベルと学習者の到達レベルのバランスを考える必要性が生まれる。また通常の authentic materials と外国語学習を目的として作成されたテキストの間における相違のもうひとつは、言語材料・言語レベルに関して意識したグレード化がなされているか否かである。authentic material の場合は、特に言語材料･言語レベルはグレード化されていない。もちろん、authentic material と学習用テキストを平行して利用することもその解決策のひとつに考えられるが、別のアプローチとしてテキスト自体が authentic な成り立ちのものを用いて、学習者の言語レベルに近づけていく試みに simplification と easification がある（Bhatia 1983）。前者の simplification は、テキスト自体を学習者の理解度を考慮し、学習者が取り組めるレベルの構文・単語を用いて書き換えることで、学習者とテキスト間に情報の伝達を生み出す試みである。一方、後者の easification はテキストの言語レベル等を変える操作は一切せずに、その内容理解を支援する工夫（質問自体が内容の流れを説明する質疑応答問題やストーリーに沿ったイラストを用意する等）を教師が前もって考え、それを活かしたタスクに取り組むことによって学習者のテキスト理解を進めようとする試みである。この２つの試みは、その操作は異なるものの、共通して学習者のレベルとテキストのレベルを近づけようとする試みである。コンピュータを含む情報技術の発達により、

authentic materials 自体様々な媒体形式を持ち、その内容・言語レベルも多岐に渡っている。それに加えて、simplification や easification のような操作を行うことによって、authentic materials自体の特徴を活かした活動を、様々な言語レベルを持った学習者が集まっているクラスにおいても利用することが可能となる。また、authentic materials の利用が、言語習得レベルが相対的に高くない学習者に適するか否かの話題に関して、Guariento & Morley(2001) は、authentic materials とタスクの難易度を関連させて考慮することで使用可能であることを示している。

森下(1996)でも指摘したように、authentic materials の特徴としてテキストと学習者間に interaction を引き起こす可能性が高いことがあげられるが、Widdowson(1980)が提案した学習者を主体とする learner authenticity が成立しないとその interaction の発生が難しくなることが予想され、authentic materials の特徴が授業に活かされないことも危惧される。テキストの authenticity を高めるためには、学習者の言語習得レベルを考慮に入れた learner authenticity も考慮する必要がある。

さらに、これらの authenticity を高いレベルに維持するためには、学習者がそのテキストを使いどのようなタスク活動を計画するかという観点にも特別の注意を向ける必要がある。次にタスクについて考える。

４．タスクに関して

学習者が授業内で取り組むタスクに関して authenticity というキーワードを意識して考えると、学習者が将来英語を用いたどのような場面に遭遇するかの予測が重要な判断基準となる。すなわち、学習者が実社会で従事する活動こそ、その活動における authenticity レベルが高いものになる。むろん、実際の外国語学習においては現実社会を模した活動を取り入れることで、そのタスクの authenticity レベルを高く維持することが考えられる。Lee(1995)は、学習者に焦点をあてた authenticity を論じる際、学習者の need analysis が必要であることを指摘し、その実践例を報告している。

実際の言語活動を模した simulated activities には様々な利点が考えられる。ひとつには、学習者が豊富な予行練習に取り組むことが可能になること。またひとつには、将来で会うであろう言語場面に触れることで目標の確認が可能となることがある。また最終ゴールへ到達するまでの自分の活動の評価を学習者自身が日々の授業の中で行うことが可能となることも期待される。さらには、ストラテジートレーニングへと学習者の意識を向けることも可能となる。情緒面から考えると、学習者の動機付けにも好影響を与えることが予測される。

実際に授業で学習者が取り組む活動の分類にはいくつかあり、そのひとつに、mechanical activities, meaningful activities, communicative activities という分類がある。これは、英語学習はそれ自体が目的としたものではなく、授業で得た知識・育成した知識を授業外の状況で使えるようにすることまでを視野に入れた分類と考えられる。authenticity に注目し、実際に教室外における英語を用いた言語活動の特徴を活かしたタスクは communicative activities に該当するが、その中でも、authenticity を意識したタスクは、何らかの達成すべき communicative goals が必ず存在するという authentic materials の特質と協調する形で、特に授業外の現実世界と授業内の学習活動を関連付ける「橋渡し」としての役割を持つことが期待される(Wilkins 1976, Guariento & Morley 2001 に引用)。

タスクを考える際には、常にそのアウトカムをどのように評価し、学習者にフィードバックを与えるかという観点を含めて考える必要がある。次に、authenticity を意識した評価について考える。

５．評価に関して

連続性を持つ一連の学習活動の中で、「評価」はそのゴールにもなり、また新たなスタートにもなる(Ur 1996)。学習者が取り組んだ活動のアウトカムの評価は様々な段階で行われ、それまでの取り組みを振り返り、それ以後のデータとする必要があり、authenticity を意識した学習活動においても、「評価」は教師にとってはのみならず学習者自身にとって重要な役割を持つ。これまで述べてきた authenticity を意識した活動を行ったとしても、その評価法が最初の目標に応じて計画されていなければ、それまでの試みが期待される成果をもたらす可能性は低いものとなる。また、評価法については具体的に考え、学習者がタスクに取り組む前に、教師と学習者の間で共通理解を成立させておくことが望

まれる(森下 1998)。authenticity を意識した評価を考える際、その判断基準となるのは、need analysis の結果をデータとして活動内容を工夫する過程で、それぞれの将来的な英語使用場面において、どのような結果をもたらすことで十分なコミュニケーション活動を成し遂げたと見なされるかの判断が重要となる。これは、学習者側から見れば、将来の目標が見え、自分の学習プロセスを把握しやすいことにつながり、学習者にプラスとなる方向での backwash 効果が期待される。また、自分の学習プロセスを把握できた場合には、自分ができること・できないことを判断し、続く学習にその情報を活かしていくことも期待され、それは strategy training の意義にもつながっていく(Dickinson 1987)。

次に学習者が strategy を意識して取り組む活動について述べる。

６．strategy training に関して

authenticity をキーワードとして計画された授業は、学習者に将来彼らが出会うと思われる言語使用場面を具体的な形で生み出すことになる。そのような状況におけるタスクに取り組むことで、学習者自らの言語レベルでいかに効率よくタスクを完成していくかという communicative strategy の訓練を進めていくことが可能となる。

また、将来で会うと思われる言語使用場面における活動は、とりもなおさず、日々の活動の中で、最終的な到達レベルを提示していることになり、学習者は常に自分のその時々の言語運用レベルがどの段階にあるか確認する機会を与えられていることになる。これが、学習者に learning strategy に意識を向けるきっかけとして考えられる。また、実際に学習者が教室外(現実社会)で出会う媒体をテキストとして使うことで、学習者が教室外において自分の学習課題を見つけ、それを利用する具体的な方法を示すことにもなり、積極的な教室外活動にもつながっていく。たとえば、映画を利用した活動を行った際には、学習者は、授業外活動として、自ら他の映画を選択し、授業で行ったタスクを自分で用意し、訓練を継続することが可能となる。Wong et all(1995)は、authentic materials を用いた活動は learning strategy の育成を可能にするが、そこで得た learning strategy は外国語学習のみならず、それ以外の教科の学習にも好影響を与えるということを指摘している。それは一人一人の学習者が常に学習ゴールを考慮しつつ、それぞれの到達レベルを客観的に見ることができるモニタリング能力の育成への期待が込められていると考えられる。Cotterall(2000)は、全ての外国語学習において、learner autonomy の段階へと学習者が近づいていく教師が支援する必要性を指摘している。言語活動の authenticity を意識し strategy training が配慮された授業は学習者が independent learners に進んでいくベクトルを示す取り組みでもある。

７．authenticity の多面的特質に関して

ここまで、便宜的に項目をあげて authenticity が授業に与えるヒントをまとめてきた。その中でも他の項目との関連性を指摘してきたように、authenticity の概念を実際の授業に活かそうとした際には、それらの特徴がお互いに関連しているという点を常に意識しておく必要がある。一連の学習過程は、目的に応じたテキスト選択から始まり、学習者の特徴・言語レベルを考慮して、そのテキストを利用したタスク活動が計画され、さらには目的に応じた評価内容が決定され、その結果を踏まえてその後の計画が立てられる。authenticity の概念はこの学習過程全般に影響を与える。したがって、テキストがauthenticity レベルの高いものに分類されるものを使うとそれを用いたタスク自体が高いauthenticity レベルを有し、それがコミュニケーション遂行能力の育成に必ず寄与すると保証されるというものではない。authenticity レベルを形成する様々な要素の存在を意識し、その時々の目的に応じたテキスト・タスク・評価法の組み合わせを考慮し、授業を計画する必要がある。逆に、authenticity の持つ多面性を無視した場合には、教師の意図に反して、十分な学習成果が生まれない場合も考えられる。もちろん、成り立ち当初から外国語学習用教材として作成されたテキストを使い、学習者が将来で会うであろう場面に役立つ言語活動を計画することも可能である。その一方で、前述したように Peacock (1997) は、authentic materials の内容自体が学習者にとって興味深いということ以　外に、学習者は authentic materials を用いた活動により高い有効性を見出していることを報告している。これは将来出会うであろう言語使用場面を意識したテキスト・タスク活動に取り組む中で、学習者は授業の中で自

分が行う学習・訓練に高い意義を見出し、それが取り組みへの高い動機付けへとつながっていく可能性を示唆している。すなわち、authentic material の存在を意識し、その利用を計画する場合には、その後に続く一連の活動にもauthenticity を意識したものが教師のみならず、学習者にとってもイメージしやすく、ゴールに対して共有意識の形成が期待される。さらには、その共通理解が学習者の動機付け、授業内活動への積極的な働きかけ(interaction)を生み出すことにつながっていくことが期待される。

８．授業においての考慮点に関して

これまでまとめたように、authenticity というキーワードを考えた際、その影響はテキスト選択にとどまらず、広い範囲において関係している。それぞれの側面が個別に影響を与えることもあれば、それらが複合的に関係し影響を与えることが考えられる。この２つの場合、後者の方が、authenticity のレベルをより一層高くすることが予想されるが、communicative approach に様々なレベルの活動が存在する(Howatt 1984, Richards and Rogers 1986 に引用)のと同様に、authenticity の働きかけにもさまざまなレベルが存在すると考えられる。これを実際の授業計画に活かす場合には、教師が、いかにして眼前の学習者が将来出会うと考えられる運用場面を提供し、その中で学習活動を計画する過程で、学習者に現在学習している内容の必要性を意識する手助けを考えていくことになる。このような配慮・工夫により、学習者とテキスト、または学習者とテキストを用いた活動との間に interaction が発生することが期待される。授業において authenticity に焦点をあてた活動を考えた際、interaction の発生を促すポイントは次の６点となる。

＊学習者は学習目的を理解しているか。→　将来役に立つ活動に取り組んでいるという自覚、学習目的に対する教師と学習者の共通認識・理解の形成が、動機付けを高めることになる。

＊学習者はテキストの内容に興味を示しているか。→　取り組んでいるテキストにおいて、リアルタイムで発信されるメッセージと自分の興味に関連を見出すことで、その学習活動が授業内で完結するものではなく、授業外の現実世界へと発展していく可能性が高まる。

＊学習者はテキストのメッセージに集中しているか。　→　authenticity を意識した授業において、学習者はメッセージを伝える媒体である言語材料に対してよりも、コミュニケーションの目的であるメッセージの内容自体に一層の注意を向けた活動が必要となる。

＊学習者はタスク完成に向けて段階的に取り組んでいるか。→　実際の英語使用場面に沿った活動内容では、テキストが提供する情報を取り出すのに加えて、その情報を利用し、ゴールまでのステップをひとつひとつクリアーしながら、タスクの完成を目指す活動に取り組むことが必要である。

＊学習者は評価基準を理解しているか。　→　タスクの完成レベルを客観的に判断するめに、英語使用場面に沿った評価基準を理解することで、どのレベルの完成状態を目指した活動をすればいいか確認できる。

＊学習者にフィードバックを利用する機会を与えているか。　→　将来必要とされる言語運用能力を見据えて、その時点における言語運用能力を相対的に確認することは、学習者の strategy training にも通じ、最終的には learner autonomy につながる可能性が期待される。

このような観点に注意をすることにより、多面的特質を持つ authenticity の意義を活かし、学習プロセスにおける authenticity レベルを高め、学習者を中心とした interaction が活発に発生することが考えられる。

９．最後に

森下(1996)に続いて、今回も authenticity をキーワードとして授業活動の質を高める方策を考えた。前回はテキストの選択に焦点を置いたが、本稿では、authenticity が有するその多面的特質に注目し、授業活動への影響を考察した。authenticity を意識したテキスト選択・授業内容計画は、学習者に将来彼らが遭遇する言語使用場面を提供し、具体的に学習目標を示すことにつながる。これは、学習者の動機付けを高めるとともに、学習内容について学習者と教師が共通理解を構築する可能性を高めることが期待される。

authenticity の概念は、授業内容に広い範囲で影響を与えることが考えられる。また、その応用方法

によっては授業内活動だけにとどまらず、そこから発展して学習者が授業外学習を自ら計画・実行する方法を提示し、learner autonomy へと進んでいくきっかけにもなりうる。authenticity を意識した活動を授業に取り入れていくためには、教師は、学習者の将来の言語利用に対する必要性や、それぞれの時点における学習者の言語到達レベルを把握しておかなくてはならず、より一層の学習者観察・理解が求められる。また、その言語材料がグレード化されていない教材を用いる際には、長期的計画のプロセスの中で、それぞれの教材・言語活動の位置づけを考え、その配列に注意を払う必要がある。

参 考 文 献 ・ 資 料

Bhatia, V.K. (1983) “Simplification v. easification – the case of legal texts.” Applied Linguistics. 4/1. p.42-p.54.

Cotterall, S. (2000) “Promoting learner autonomy through the curriculum: principles for designing language course.” *ELT Journal vol.54/2.* Oxford University Press. p. 109-p.117.

Dickinson, L. (1987) *Self-instruction in Language Learning.* Cambridge University Press. 1987

Guariento, W. & Morley, J. (2001) “Text and task authenticity in the EF classroom.” *ELT Journal vol.55/4* . Oxford University Press. p.347-p.353

Lee, W.Y. (1995) “Authenticity revisited: text authenticity and learner authenticity.” *ELT Journal vol.49/4.* Oxford University Press. p.318-p.328.

Peacock, M. (1997) “The effects of authentic materials on the motivation of EFL learners.” *ELT Journal vol.51/2.* Oxford University Press. p.144-p.156.

Richards, J.C. and Rogers, T.S. (1986) *Approaches and Methods in Language Teaching: A description and analysis.* Cambridge University Press.

Ur, P. (1996) *A Course in Language Teaching Practice and theory*-.Cambridge University Press

Wong,V.,Kwol,p.and Choi, N.(1995) “The use of authentic materials at tertiary level.” *ELT Journal vol.49/4.* Oxford University Press. p.318-p.322.

Yoshida,K.(2002) “Need for EFL Standards for Teaching English in Japan.” Special Opening Lecture at the annual meeting of the Council of College English Teachers Conference in Tokyo on August 24, 2002.

森下　浩二（1996）「”Interaction”発生装置としての Authentic materials」　*佐世保工業高等専門学校　研究報告　第 33 号*　p.45-p.51

森下　浩二（1998)「マイクロレベルにおけるセルフアクセスへの取り組み」　*九州英語教育学会紀要第 26 号.*　p.1-p.7.

吉田　研作（2000)「水槽から大海へ」　*英語教育* 49/5. 大修館. p.37